

# 母乳栄養で保育された極小未熟児の長期発育調査

聖マリア病院新生児科

橋本 武夫

## 研究目的

前回、われわれは、超未熟児における母乳栄養群と人工栄養群に対し、短期発育、長期発達および感染防禦などについて検討した。症例数が充分でなかったため、ある程度の傾向を知ることができたが、発育については、出生体重への復期日数の比較で、人工栄養群に比して母乳栄養群は約1週間おくれるという事がわかった。しかしその後の経過も、症例数が少なく、十分な結果は未だ出し得ていない。また、超未熟児の場合は症例それぞれに特有の所見や合併症を有する事が多いため、栄養法以外の因子が関与する可能性が強くなる。そこで、今回は、極小未熟児を対象として、母乳栄養群と人工栄養群の長期発育を比較検討してみることとした。

## 研究対象および研究方法

昭和51年から57年迄に出生し、聖マリア病院ハイリスク新生児センターに入院し、生存した極小未熟児(1000~1499g)のうち、最高6才まで定期的にフォローした144名(在胎30±3.1週、体重1248g±138g)について、縦断的方法により栄養法別にその発育をみた。

144名のうちわけは、男児70名、女児74名(AFD103名、Light for dates infant 41名)である。

また、生後3ヶ月間母乳栄養が可能だった児を母乳栄養児とした。途中、もらい乳を追加された児も母乳栄養児に含めたが、混合栄養は人工栄養(ミルク)児に含めた。このように分類すると、母乳栄養児は42例(29%)、人工栄養児は102例(71%)となった。

なお、骨レ線によりくる病所見がみられ、ビタミンD剤の投与をうけた児は、母乳群7(7/42=16.7%)、人工栄養群17(17/102=16.7%)と差はなかった。これは前回の超未熟児における結果と同じく、興味ある知見と思われた。

## 結果および考察

1) 定期的に最高6才までフォローし得た144名の極小未熟児を、縦断的方法により、その計測値(身長、体重)を、母子健康手帳の乳、幼児身体発育曲線(昭和55年調査)にプロットした(図1)。その結果、身長においては3生月からすでにcatch upがみられるが、体重はおよそ1才すぎにcatch upがみられ、身長の発育に比較し、ややおくれる。しかし、catch up後は標準域内で順調に発育していると思われる。

2) 同様に、これら144名をAFD児と、Light for dates infantにわけて、それぞれ、栄養法別に男女の発育比をみたものが図2、および図3である。

3) AFD児においては、3生月で、身長に母乳群、人工栄養群ともcatch upがみられるが体重はおくれて、1才でそれぞれcatch upがみられている。男女比には大きな差はないが、女児において、人工栄養群がやや体重増加が大きく、特に6生月~9生月において、身長、体重ともに人工栄養群が高値を示した。さらに、2才以後も常に体重において人工栄養群が優位を示したが、男児においては3~4才で逆に母乳栄養群が優る場合もみられた。

4) Light for dates infantでは、図3のごとく、身長のcatch upはAFD児とかわらなかったが、体重のcatch upは両栄養群、男女群ともおくれ、男児では3~4才にかけて、女児では1~2才にかけてみられた。しかし、AFD児で、女児の2才以後の体重増加に、人工栄養群の優位性を認めたのにくらべ、Light for dates infantの女児の2才以後の体重増加は、逆にわずかに母乳栄養群が優れていた。しかし、いずれにしても、栄養別に優劣をつけるべき大きな差はないといえる。

ただ、非常に興味あることは、AFD児、Light for dates infantとも、9生月の女児

において、母乳栄養群よりも人工栄養群が有意に高値を示した点であるが、その原因は明らかではない。

以上の結果より、極小未熟児の新生児期、乳児期早期の母乳栄養は、その後の身長、体重などの

発育において、ほとんど差はみられなかった。特に、AFD児においては、6才時には身長、体重ともに10~75パーセンタイルに位置し、成熟児同様、極小未熟児においても、母乳栄養はその後の発育値に遜色は認めなかった。

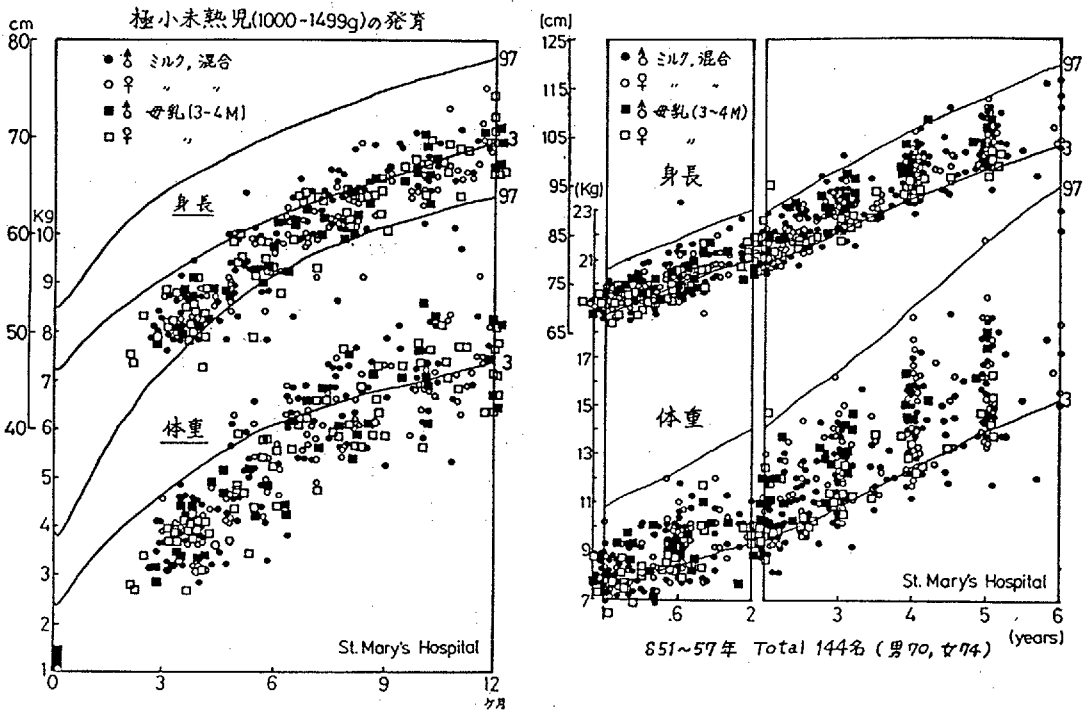


図1

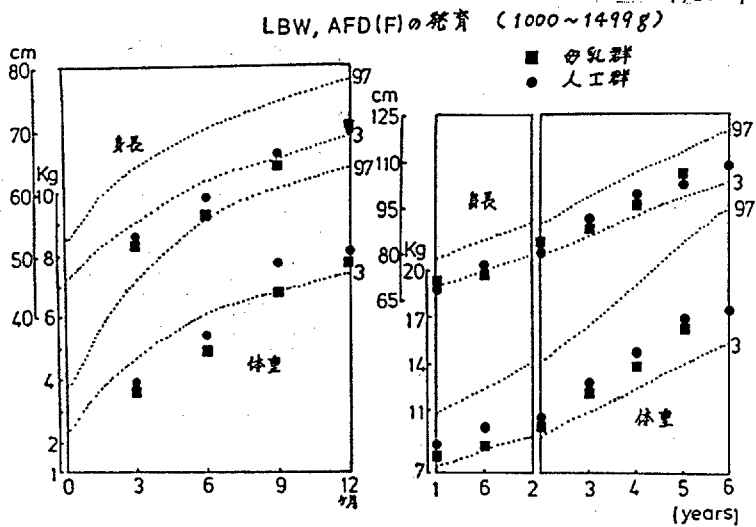
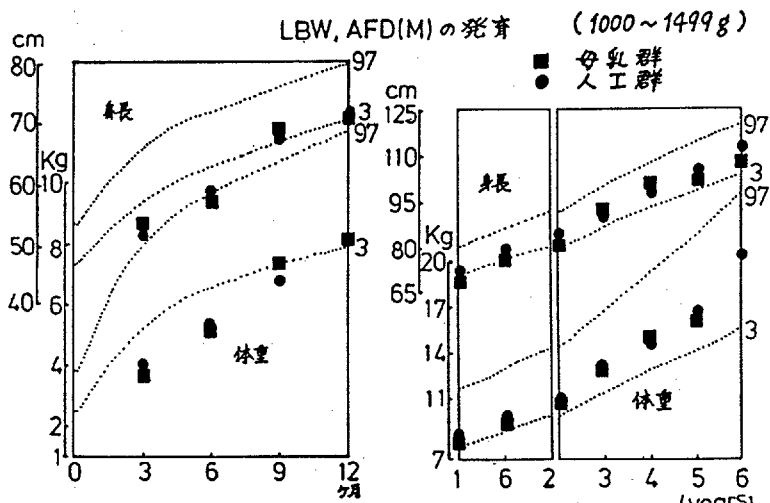


図 2

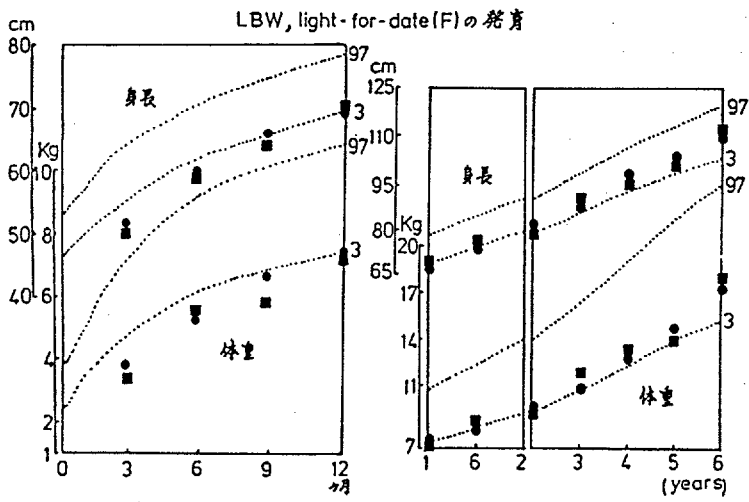
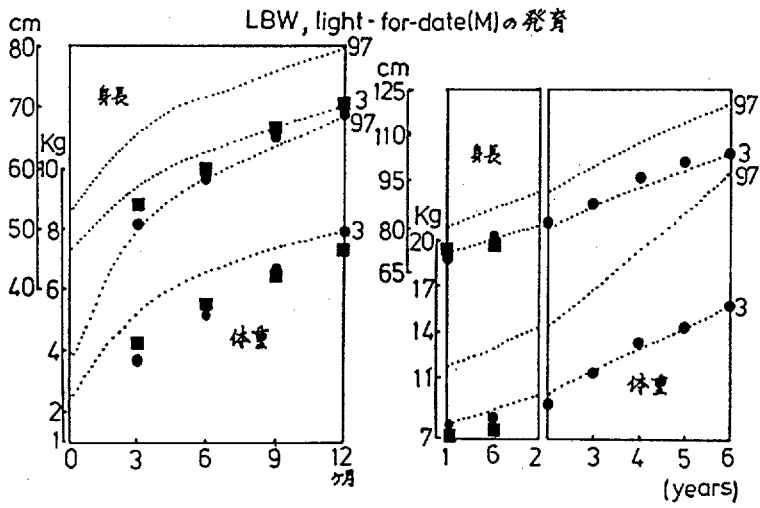
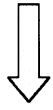
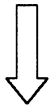


図 3



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 研究目的

前回,われわれは,超未熟児における母乳栄養群と人工栄養群に対し,短期発育,長期発達および感染防禦などについて検討した。症例数が充分でなかったため,ある程度の傾向を知ることができたが,発育については,出生体重への復期日数の比較で,人工栄養群に比して母乳栄養群は約1週間おくれるという事がわかった。しかしその後の経過も,症例数が少なく,十分な結果は未だ出し得ていない。また,超未熟児の場合は症例それぞれに特有の所見や合併症を有する事が多いため,栄養法以外の因子が関与する可能性が強くなる。そこで,今回は,極小未熟児を対象として,母乳栄養群と人工栄養群の長期発育を比較検討してみることにした。